



日本記者クラブ昼食会

韓日関係の新しいビジョン

朴槿恵 ハンナラ党 代表

2006年3月9日

朴正熙大統領の長女であり、韓国で初めての女性大統領に一番近い位置にいる朴槿恵代表は、「相互信頼」をキーワードに新世紀の二国間関係についてのビジョンを示した。東アジア共同体構想など、より広範な日韓の協力関係の中で、歴史問題の解決を進めたいという考えだったが、「加害者と被害者という歴史的事実は変化することなく、私たちの前にある」とも。

若宮啓文＝司会（朝日新聞論説主幹） 真ん中に座ってらっしゃるのが、韓国ハンナラ党の党首をされている朴槿恵さんです。私はきょう司会をさせていただきます朝日新聞の若宮と申します。

実は、2月12日から17日まで、日本記者クラブ取材団が訪韓しまして、私が団長を務めました。地方紙も含め18社18人、事務局も含め20人で行ってまいりました。主たる目的は、気が早いのですが、ポスト盧武鉉をうかがう人々に会ってこようということで、それでまさきにお訪ねしたのが、朴槿恵さんだったわけです。そういういきさつもありましてきょうは司会をしる、ということになりました。どうぞよろしく願いいたします。

日本記者クラブ取材団が朴槿恵さんにお会いした時に、ぜひ日本にも来ていただいて、日本記者クラブで話をしてください、と申し上げたのですが、まさかこんなに早くきていただけたとは思いませんでした。

申すまでもないのですが、朴槿恵さんは韓国大統領・朴正熙さんの愛娘、お嬢さんでありまして、ですから、青瓦台で成長なさったと聞いております。いまうかがいましたら、小学校4年生の時から青瓦台に入って、あそこから学校に通ったということだそうです。それで、大変な悲劇がありまして、74年にお母さまの陸英修さんが非業の死を遂げられて以来、お母さんにかわってファーストレディ役で朴大統領にお仕えしたというのは皆さんご存じの通りですが、79年にそのお父さまも凶弾に倒れたという大変な体験をなさっているわけです。

国会議員になられたのは98年。そして、2年前の3月に、韓国最大野党のハンナラ党の代表になられて、以来、先頭に立って政治活動を続けてきておられます。

大変日韓関係が厳しい中あえて来ていただいたということで、きょうは大変意味のあるお話が聞けると思います。

韓日間によそそしい雰囲気

朴槿恵代表 尊敬する日本記者クラブの会員の皆さん、また、この場にお越しいただきました皆さん、本日、貴重な機会を与えてくださった方々にお礼を申し上げます。加えて、常に民主主義と自由言論の発展のために尽力されている、マスコミ関係者の皆さんに尊敬の意を表します。

2日前、私はシャトル飛行機に乗って東海を渡って来ました。

金浦空港から2時間余りで羽田空港に到着し、韓国と日本について考えました。特に、2つの点が大変印象深かったです。

1つ目は、私がこのたびの訪問において、ビザなしで来たということです。日本と韓国の間をノー・ビザで往来出来るということが意味しているのは何でしょうか。

2つ目は、私は金浦空港から飛行機に乗って来ました。韓国では国際線は全て仁川空港から発着し、金浦からは国内線だけが発着しているのですが、国際線の中でも唯一日本行きの便だけが発着します。これは何を物語っているのでしょうか。

韓日両国は地理的に隣国であるだけでなく、年間の交易規模が700億ドル、1年に400万人以上の国民が互いに訪問している非常に“近い隣国”です。2002年には歴史上初めてワールドカップを共同開催いたしました。当時、韓国は日本を応援し、日本もまた韓国を応援しました。その時、私たちはどんなに感動したことか。

そうした韓日関係に最近気まずく、よそそしい雰囲気が漂っているようです。

機内で私は、韓日両国の過去と現在、そして未来について考えつつ、現在の韓国と日本の間にある問題をどのように解決して行くべきかについて考えました。

韓日両国は数千年にわたる長い歴史の中で隣国として生活してきました。歴史的に遙かに長い間、善隣友好関係を持続してきましたが、葛藤と戦争に包まれた時もありました。

特に、20世紀の前半に非常に不幸な歴史がありました。終戦と韓半島の独立後60年が過ぎる間、韓日関係に大きな進展がありましたが、いまだに過去に縛られ一層広大な未

来へ進めずにいます。

今後の韓日関係には 20 世紀の不幸な過去を乗り越え、21 世紀に見合った新しいビジョンが必要です。

1965 年に私の父が韓日国交正常化を進めた時、私は中学 2 年生でした。当時は批判の声もありましたが、国交正常化は過去 40 年間、両国の交流・協力の土台になりました。

1965 年の国交正常化が韓日関係においてエポックを画したとするならば、いまは歴史の新しい転機を作って行かなければなりません。私たちは韓日関係の成熟した発展、ひいては東アジアの平和と繁栄の同伴者にならなければなりません。そうするためには私たちが克服しなければならないハードルもあり、積極的に対応して行かなければならない課題もあります。私は特に、3 つの分野において交流と協力を一層深めて行かなければならないと思います。

第一に、文化的、人的交流の無限の可能性を一層拡大して行かなければなりません。

私は過去の歴史をめぐった政治的な葛藤にもかかわらず、韓日両国の文化交流が着実に拡大している現象に関心をもって見守っております。韓国人であって日本で愛されている B o A と、日本人であって韓国で愛されているユミン（注：韓国で活躍する日本人女優 笛木優子）を見ながら、こうして両国の国民の心が近づいているのを感じています。キムチと焼肉が日本の食べ物になったように、寿司とうどんは韓国人が好む食べ物になりました。日本の若者たちが韓国語学習と“韓流熱風”に夢中になっているように、韓国の若者たちも日本文化に親しみを感じています。

私たちが文化の交流とフュージョン (fusion) を一層深めることが出来るならば、そこには経済的な価値のみならず、両国の信頼を回復する道が開かれると私は期待しています。

こうした点から見ても最近、日本が韓国に対して恒久的にビザ免除措置を断行したことを、私は高く評価いたします。国民と国民の間での交流が深まれば深まるほど、相互理解はより拡大して行くことでしょう。

私は今後、韓日両国が言葉の壁を低くするために、相手国の言葉の学習を政府が支援し、

特に、中学と高校で双方の言葉の教育を強化する必要があると思います。

小泉改革とは経験を共有できる

第二に、経済協力を一層深め、究極的には経済共同体へと移行して行かなければなりません。

現在、北東アジアは世界経済の中心に浮上しています。世界第 2 位の日本経済が復活しており、第 7 位の中国経済は急成長を重ねています。そして第 11 位の韓国経済も負けず活動的です。こうした状況の中、韓国と日本の経済協力がより緊密になるとするならば、そのシナジー効果はとてつもなく大きいものになるでしょう。

しかしながら、1998 年から共同研究を始め、昨年妥結予定であった、両国の首脳合意の F T A が農水産物の問題などで膠着状態に陥ったのは遺憾であります。

ハンナラ党は韓日自由貿易協定の交渉が近く再開されることを望んでいます。ひいては韓日両国が国際金融、知的財産権、環境とエネルギー、労働市場等の分野においても、交流と協力を一層強化して行くとするならば、両国の経済発展だけでなく、より成熟した経済共同体へ向かって行けると 생각합니다。

最近、日本の書店では復活に関する本が大変売れていると聞いています。“失われた 10 年”という長期の不況を克服し“黄金の 10 年”を開き始めた日本国民に、お祝いの言葉を申し上げます。

私は小泉政権の郵政民営化、財政健全化、そして経済原理の拡張などの改革政策が、こうした跳躍をもたらす原動力だと思います。私とハンナラ党も、韓国経済の再跳躍のため“小さな政府・大きな市場”に向けた経済改革を一貫して主張してきました。ハンナラ党と小泉政権の経済改革プログラムは似ている部分が多いので、経験を共有できる点も多いと思います。このようなお互いを結びつける共通の価値観は、両国の経済協力を一層強化し、ひいては経済共同体に向かって行くための重要な基盤になるものと思います。

第三に、北東アジアの平和と繁栄のために、安保上の緊密な協力が必要であります。

東アジア共同体を目指して

韓米同盟と日米同盟は北東アジアの平和と安定の礎になっており、今後も中心的な役割を担って行かなければなりません。韓日両国は韓米同盟と日米同盟の枠組みの中で、韓日の安保協力を強化して行かなければなりません。韓米日の三国は緊密な政策共助と戦略樹立を通じて、北東アジアの安定と韓半島の平和に貢献しなければなりません。

今もなお北東アジアの平和を脅かしている北朝鮮の核問題を、韓米日の三国は、緊密な政策共助によって解決して行かなければなりません。韓半島の非核化は北東アジアの平和と繁栄の必須条件です。北朝鮮の間違った判断を防止し、核兵器を放棄することのみが生き残れる道であるということを自覚できるように、韓米日の三国は共同の戦略を取り、足並みをそろえて行かなければなりません。

私は昨年3月と5月にアメリカと中国を訪問しました。その時に、北朝鮮の核問題の解決策は“大胆で包括的な接近”であるべきだとし、6カ国協議の当事国が共同の戦略でアクセスすることを提案しました。北朝鮮が核を完全に放棄するならば、安全保障、経済支援、修交など現実的で実行可能な提案をすべきですが、もし北朝鮮が核兵器を放棄しないとすれば、経済支援も安全保障もなく、厳しい結果だけが待ち受けているという点を明確に自覚させるべきだというのが趣旨でした。

こうした点から昨年の9月に6カ国協議で共同声明が採択されましたが、北朝鮮の偽札問題等によって、6カ国協議は再び膠着状態に陥ってしまいました。北朝鮮は偽札の製造をただちに中断し、国際社会の責任ある一員として行動すべきであり、早急に6カ国協議に復帰し、核問題の解決に向けて協力すべきです。北朝鮮が真に変化と改革の道に立つとするならば、私とハンナラ党は、北朝鮮の経済難の解消のため大々的な支援をするつもりです。

韓半島の平和のための日本の役割は非常に重要です。私はこれまで日本が6カ国協議などを通じて、韓半島の非核化のために努力された点を高く評価いたします。

韓、米、日の三国は韓半島の非核化を平和

的に達成するため、緊密な共助を通じて共同の戦略を模索し、合意された内容は躊躇なく推し進めて行かなければなりません。私とハンナラ党はそのための協力を惜しみません。

韓日両国はこれまで文化と経済、安保分野において交流と協力を深めてきており、大きな成果を収めました。

今後も共に開拓して行かなければならないことが多くあります。

世界はいまや国家間で1対1で競争する時代を超えて、もはやEUやNAFTAのように地域共同体を構成し、地域レベルで競争しています。私は究極的には東アジアもEUのように“東アジア共同体”へと発展して行かなければならないと思います。

信頼回復への一歩は正しい歴史認識

こうした観点から、その軸になるべき韓日関係が、より緊密に発展して行くことは単に韓国と日本だけの問題ではなく、東アジア共同体へと進んで行くビジョンを実現するための最初の段階だと思います。にもかかわらず、現在の韓日両国の間にはハードルがあります。それは一言でいいますと“信頼問題”であると思います。

韓日両国の間に何よりも相互信頼の回復が必要です。基本的な信頼がないとするならば、果たして私たちが真の同伴者だといえるのでしょうか。百の言葉よりも、責任ある姿勢と実践する行動が必要な時です。

信頼回復の第一歩は“過去に対する正しい認識”です。

過去の歴史を正しく認識せずには信頼を回復することも、新しい未来を切り開くことも出来ません。私は日本に歴史を正しく認識しようとしている、良心的な識者と市民団体が多いということを承知しています。こうした方々が、両国の過去の歴史に対する正しい認識のために傾けて来られた努力に対して、心から感謝の意を表するところです。

私は韓日両国の指導者、知識人が、真摯な気持ちで“歴史との対話”をはじめめることを提案します。何よりも歴史に対する認識の差を狭めなければなりません。

これまで「韓日歴史共同委員会」のような努

力もありましたが、不十分な点が多いと思います。フランスとドイツの高校生は共同の歴史教科書で勉強することになる、と聞いたことがあります。フランスとドイツにできたことが、韓日両国ができない理由はないと思います。

過去の歴史問題を解決するために、私は歴史教科書を共に書き、ひとつの歴史的事実を両国の学生たちが共有出来るようにすることを提案いたします。

日本の指導者の皆さんも、歴史との対話に誠意を持って取り組んでいただくことを期待しています。歴史との対話は、互いに相手と立場をかえて考えるところからスタートしなければなりません。過去の歴史においては確かに加害者と被害者が存在しました。そうした事実には変わりがありません。こうした認識のもとで対話がなされ、信頼が築かれなければなりません。

靖国神社参拝の問題におきましても、隣国の国民の感情を配慮し、他の成熟した方法を模索する必要があるのではないのでしょうか。

日本は「未来のための選択」を

私は昨日、小泉総理にお会いし、韓日両国が未来に向けて進まなければならないのにもかかわらず、靖国神社参拝問題、教科書問題、独島問題、従軍慰安婦問題などによって、前進できずにいることが残念であり、こうした問題を解決することによって、より大きい未来のために共に歩いていくことを望んでいると申し上げました。小泉総理も私のこうした考えに同意されました。

企業においても、以前は単に良いものを作ることが重要でありましたけれども、いまや顧客から「良いものである」との評価を得ることがより重要であるといえます。同様に日本が平和を重視すること自体も重要なのですが、共に協力して行かなければならない近隣の国々から、そのように認識されることも重要なのです。

これは究極的に日本政府と日本国民の課題であると思います。私は日本が“未来のための選択”をすることを期待しています。

これからは両国の若者たちが、共に手をつ

ないで未来へ行けるように、道をひらいてあげなければなりません。歴史の問題がその妨げになってはならないと思います。私たちの子孫を過去から自由にしてあげなければなりません。それは今の世代がどのような選択をするかにかかっています。

韓国の苦しい歴史の中には、生活の場を日本におかざるを得なかった60万の在日韓国人がいます。在日韓国人は歴史の犠牲者であり、日本に住んでいる他の外国人とは違った歴史的特殊性を持っています。私は日本の社会が、在日韓国人の人権と地位に対して、特別な関心を持って接してくださることを願っています。在日韓国人の地方選挙の参政権と国民年金の支給、公職進出においてのハードルなどに対しても、前向きに検討していただきたいと思います。

互いにあたたかく接することによって、信頼がより確固たるものになると思います。韓国と日本は共に世界史の奇跡のヒーローです。私は韓日関係の新しいビジョンを描きつつ、両国が“近くて近い国”として“21世紀の戦略的な協力者”として位置づけられるとするならば、韓国と日本に新しい未来が広がると確信しています。一個人は隣人が嫌ならば引っ越せばいいのですが、国家はそうすることもできません。「親しく過ごすことがお互いのためになる」という平凡な真理を、新しいビジョンの出発点にしなければなりません。

私は相互尊重と互惠の精神をもって、いま私たちの前におかれている不信のハードルを克服し、韓日関係が大きな発展を遂げ、ひいては東アジア共同体を必ず築き上げることを心から望んでいます。

私は1952年、朝鮮戦争のまっただなかに生まれました。私の年代の韓国人の多くが非常に苦労したのですが、私も波乱万丈の人生を歩んでまいりました。

1997年、韓国経済が大きな危機に直面した時、私は「やっとの思いで立て直した韓国を、こんなことで崩壊させるわけにはいかない」という思いで政治に入門いたしました。私は政治家としても“信頼”に最高の価値を置いてまいりました。韓日関係の発展も信頼にかかっているということを、私は常に忘れずにいるつもりです。

17世紀末の徳川幕府で朝鮮通信使であった雨森芳洲は、当時非常に悪化していた朝鮮との関係を改善するために“交隣提醒”という文章を書き、江戸幕府に申し述べたと言われます。朝鮮との関係回復に情熱を持っていた雨森は、朝鮮が礼儀道徳を重んじる社会であることを力説しつつ「誠信をもって外交に臨むべきであるが、互いに欺かず、争わず、真実をもって交わるべきである」との忠告をしました。

5年前、新大久保駅で一人の命を救うために、自らの命を投げ出した韓国人青年の美しい犠牲が、私たちの心の距離を狭めたではありませんか。その尊い青春の犠牲が無駄にならないことを望んでいます。

私は韓日両国が信と誠の精神で過去を整理し、未来を開拓することを希望します。それが可能であると思っています。私も韓国の政治家の一人として、韓日両国と北東アジアの新しい未来のために最善を尽くすことを、皆さんに約束いたします。

硬い話一方になりましたが、ご清聴ありがとうございました。

日本にも韓国のキムチが大好物の方々が多くいらっしゃると思います。

皆さんの中にもキムチが好きな方がいらっしゃると思いますが、キムチについてどれほどご存知でしょうか。キムチは味も良ければ健康にも大変良い食べ物であります。

キムチを食べるとSARSや高病原性鳥インフルエンザ(AI)にもかからないといえます。皆さんは韓国について多くのことをご存知と思っていられるかもしれませんが、キムチひとつをとっても、韓国には皆さんがご存知のものよりはるかに多くの種類があります。ぜひ韓国にいらっやって、季節別、種類別で数百種類もあるキムチを味わっていただきたいと思います。

機会があれば、私が皆さんをご案内いたしましょう。

ご清聴ありがとうございました。

若宮 それでは、この間のクラブ訪韓団で副団長の一人でもあった影山企画委員から代表質問をしていただきます。

影山日出夫企画委員（NHK解説主幹）
今回、日韓の首脳同士が話さえないという現状を大変憂慮されて、あえて来日を決断されたと聞いております。きのうは小泉総理大臣ともお話をされて、朴代表のお考えに総理も同意されたということですが、9月までの小泉総理の任期中に日韓関係、とりわけ首脳レベルの関係が打開に向かう可能性があるという感触を得られたのでしょうか。

また、安倍官房長官にも会われて大変長時間お話をされたと聞いています。ポスト小泉を担うリーダーに、先ほどの歴史の正しい理解という意味において、具体的にどういう行動を望まれるのか、おうかがいしたいと思います。

重要なのは指導者の意志

朴 韓日関係が再び回復し、友好、協力関係を深めるために何が重要かと申しますと、指導者の意志だと思います。国交正常化になった1965年には1年に1万人が交流したということですが、いまはすでに1日に1万人以上の人的交流があります。若者たちの間においては、お互いの理解が進み、文化交流によって接近しているのです。

こうした人的交流、民間レベルでの理解も重要だと思いますけれども、政治指導者が韓日関係についてどういった観点、どういった意志を持っているかが、問題解決のための決定的な要になると思います。

小泉総理が経済改革を主導され、10年におよんだ不況がいま黄金の経済時代になったように、外交面においても、特に過去の歴史問題によって膠着状態にある韓日関係を在任中に解決されるよう希望しました。韓日FTAの締結、ひいては両国関係が回復することで、東アジア共同体をつくり上げることに大きな役割を果たされ、韓日関係を発展させて両国民の記憶に残る総理になっていただきたいと申しあげました。

また、私が申しあげた懸案について、総理も共感を示してくださいました。今後、協力していこうといったお話をしてくださったので、強い意志を持って進められるとするならば、よい結果も得られるのではないかと思います。

また安倍官房長官とも、長い間お話を交わすことができたのも大変有益でした。

結局、重要なのは2点だと思います。両国がお互いの繁栄と平和のために協力しなければならないことがいっぱいあるのに、過去の問題にこだわって、そのために前へと進めないといった点は、政治指導者たちが解決していかねばならない問題だと思います。

また、若い世代、純真無垢な子どもたちは、韓日の過去の苦痛を知らずに生まれるのですが、私たちの時代にこの問題を解決しないとすれば、次の世代に再びそういった苦痛が課せられることにもなる。こうした二つの観点から、強い意志を持って努力を傾けていただきたいと思っております。

影山 靖国問題については、小泉総理大臣が大変強い姿勢を続けていることとあわせて、韓国の盧武鉉大統領の対応も大変厳しいものがあって、この両方が相まって大変厳しい首脳関係になっているという指摘もあります。そのことも踏まえまして、例えば、仮に次の日本のリーダーが、総理大臣になってまた靖国神社を参拝したら、その瞬間に日韓の首脳レベルの関係というのは閉ざされてしまうとお考えなのか。それとも、次の政権の対応によっては、韓国としては靖国神社の参拝には反対を続けるけれども、例えば首脳レベルの対話は続けながら、その中で解決を目指していくという選択肢はあるとお考えになるのでしょうか。

朴 靖国神社参拝の問題も、歴史の問題を解決しようとする強い意志があるとするならば、より成熟した解決策があると思います。いまはどの国であれ、もうすでに一国だけで存在できる世界ではないと思います。経済、安保、すべての分野において、どの国であれ国際的な枠組みを離れて暮らすことはできません。信頼を回復し、友好的なムードの中で前へ進むときに、ほかの問題も解決されると思うのです。成熟した方法としての解決策がないとするならば、リーダー同士の対話があったとしても、真の意味での信頼関係を持つということは難しいと思いますし、真なる意

味での信頼がないとするならば、真なる意味での友好前進も難しくなってくると思います。

いまは、もうすでに世界は地域共同体へ向かっています。韓国と日本も東アジア共同体を構築しなければならないと思うのです。

影山 朴代表は、日米韓の信頼関係、同盟関係を強化することが大事だとおっしゃいました。先日、私たちがソウルでお話をうかがった際にも、韓国の現政権はアメリカとの関係をあまり重視していないということを批判をされておりました。その観点からうかがいます。この三国関係を強化する中での日韓関係の再構築という意味で、ハンナラ党政権になれば、現政権と違った日本への対応はあるのでしょうか。つまり、日本対して盧武鉉政権と同じ対応を繰り返すのか、それともいまの政権とは別な対応をとるということも選択肢として出てくるのでしょうか。

盧武鉉大統領とは違う方法で

朴 私は、外交問題においては、一度結ばれた同盟関係は非常に重要なものと思っています。同盟関係とは簡単になるものではないと思いますし、多くの人たちの犠牲と努力があって結ばれた関係だと思うからです。

一度、友邦関係、同盟関係になったとするならば、それを大切に思い、よりよい関係に深まるように努力をしなければならないと思います。

私は、そうした外交観、国際観を持っています。ですから、韓国と日本の間が以前のようではないと、つまり、信頼関係に何か問題があるのではないかとといった点を懸念していますし、野党としても、互いの政府の関係が信頼回復できるように協調してきました。

盧武鉉大統領と同じような対応をするかといった質問に対してですけれども、人が違えば、その方法も違ってくると思います。韓日関係を友邦関係として発展させていくことにおいて、私には私の方法がありますし、ハンナラ党にはハンナラ党の方法があります。盧武鉉大統領の方法は、私の方法とは確かに違います。

例えば、大統領は感情をもって対応する。

その結果、対話が断絶されてしまうということは、両国の国民にどういう利益があるのでしょうか。対話が断絶してしまうと、お互いに大変不便な状態になります。それを知りつつも、お互いに対話もしないからといって問題が解決されるわけではないのです。私は、問題が解決される方向で、お互いに努力を傾けなければならないと思います。

影山 南北関係についておうかがいします。日本記者クラブ取材団がウリ党の鄭東泳さんにお話をうかがいましたところ（注：議長当選前）年内にも南北首脳会談があるだろう、自分が去年、北朝鮮に行きそう約束してきたという話をされました。朴代表は、その可能性があるところになりますか。また、朴代表自身は、金正日という指導者をどうごらんになっていて、例えば政権をとられた場合、自ら対話をしてみたいという意欲をお持ちでしょうか。

南北会談はより実質的な成果を

朴 南北首脳会談があるかどうかについては、私は分かりません。私とハンナラ党の立場は、南北のリーダーの会談に反対するわけではありません。それによって、深刻な問題となっている北の核問題の解決、韓半島の平和のための実質的な成果を上げることができるならば、それは望ましいことであり、決して反対することではないと思います。

しかしながら、それを推進するうえで守らなければならない原則がいくつかあると思います。実質的に副作用のない成果を上げるためです。北朝鮮問題は、何よりも国民的な合意とコンセンサスのもとに、進められなければならないと思います。南北の首脳会談は、その議題の決定と推進においても非常に公正で、透明に進められなければならないと思います。

また、すでに一度お互いに会ったことがありますので、再度会うことになるのであれば、一回限りのときのようなイベント式の出会いになってはなりません。何らかの実質的な成果がなければなりません。北の核問題の解決のための進展がなければなりません。

それ以外にもいろいろと韓国の国民が望む事業もあります。日本も、日本人拉致被害者の問題でいろいろと苦心されていると聞いています。また、その解決のために努力していらっしゃると思います。韓国にも、北朝鮮にまだ生存している国軍の捕虜が400人、それから拉致された方々も490人、合わせると1,000人ぐらいの人々が家族と生き別れで暮らしております。彼らの問題は、大変年をとっていて、また体が不自由だということ。

解決が遅れてしまいますと、後で後悔するかもしれないのです。何時間かかければ会える距離なのに、会うことが出来ぬまま家族が死亡してしまうということは、残念なことです。こうした点で、一定の実質的な成果を上げる会談にならなければならないと思います。

2002年に私は金正日委員長に会いました。個人的には母を北朝鮮のために亡くしました。また、父も亡くしたといった悲しみもあります。こういったことを私の胸に、そうっとしておくというのは大変難しいことでした。しかしながら、南北の平和定着、また未来のために進めていかなければならないという思いで、私は北朝鮮を訪問し、金正日委員長に会いました。さまざまな問題について、胸襟を開いて対話をすることができました。

1972年7月4日の共同声明は、南北で平和的に推進していこうといった大変重要な声明でしたが、これまでに成し遂げられたものがなく、韓半島の平和定着になりませんでした。私は、共同声明の精神が実際に成し遂げられるように、お互いに努力をしようということを提案しました。また、国軍の捕虜や、朝鮮戦争のときに行方不明になった人々の行方の確認なども含めて、解決していきたいといったことを申しあげました。

また、離散家族についても、恒久的な面会所をつくり、しばしば会えるようにしていこうといったこと。また、当時イシューになっていた金剛山のダムの工事もしていこうといったこともお話ししました。それに対して約束をしましたし、その約束の中で実行されたものもありますし、いま進行中のものもあります。金正日委員長を訪問して感じたことは、国民的な合意とコンセンサスを土台に進めて

いったとき、お互いに信頼を構築し、そして信頼のもとに平和の定着と共同发展を成し遂げていけるのではないかといいた確信でした。

政権をとることになったら、こうした実質的な成果を出せるよう、合理的で透明な方法で対話することは、私は望ましいことだと思っています。

影山 来年の韓国大統領選挙が持つ歴史的な意味をどうお考えになっていますか。そして、これはソウルでも質問いたしましたが、朴代表ご自身は、この大統領選挙に向けてどのような意欲をお持ちになっていますか。

朴 来年の大統領選挙は、いつにも増して非常に重要な意味があると思っています。果たしてこうした状況で韓国がこのまま進んでもよいものか。私、そしてハンナラ党、またハンナラ党を支持している多くの国民が、方向を変えなければならないと思っています。それが、韓国の発展のために必要だと思っています。

そうした観点からも、来年の選挙では必ず政権交代がなされなければならないといった使命感を持っています。

その選挙に出馬するかどうかについてはですが、私はいま、ハンナラ党の代表であります。代表である限り、私が党の支持率を高め、また国民から多くの信頼と声援を得ることができるよう務めるという、私の役割に忠実でいなければならないと思っていますので、そうした問題については慎みたいと思います。

若宮 どうもありがとうございました。それでは、会場の皆さんから質問をしていただきたいと思います。

小井土有治（日経出身） 北朝鮮との対話は望ましいということでしたけれども、ドイツの場合と違って、南北統一はできないのではないかとこのまま分断が固定化してしまうのではないかと懸念もあると思いますが、いかがでしょうか。

統一を急ぐべきではない

朴 私は、南北が統一に向かっていくためには、すぐに政治的、領土的統一をしようとするべきではないと思います。まずは、韓半島の平和定着と南北の共同发展を推進していかなければならないと考えています。また、南北の共同发展と平和定着のために重要なこと、また重要な方法としては、北朝鮮が核を放棄し、開放路線に出てきて、国際社会の責任のある一員として加わることが最も効果的なよい方法だと思います。そうしていくためには3つの重要な原則を守らなければならないと思います。

1番目は、共同发展、平和定着のために南北の交流が活性化されなければならないと思います。そのためには、何よりも政府が安保問題を確固たるものにしなければなりません。ドイツもそうであったように、安保問題について政府が確実な信頼を得たときに、初めて国民は不安感なしに南北の交流を積極的に支持すると思います。ですから、安保問題を確固たるものにすることが必要だと思います。

2番目には、南北の対話、また交流、関係が制度化され、原則とルールがなければならないと思います。いまの南北関係は、北朝鮮がよしとすれば進められ、また、ノーといえ、すぐに断絶してしまう。制度化されていません。北朝鮮に左右されてしまう、そうした非常に安定感のない状況にあると思います。こうなると、南北の発展に何の役にも立たないと思います。ですから、原則とルールを確立し、それが実行され、そのように実行されたものが蓄積されることによって制度化され、それによって国民の信頼を高める。そういった方向へ向かわなければならないと思います。

南北の問題は、民族の問題でもありますけれども、ひいては国際問題でもあると思います。ですから、特に周辺国家との関係において、信頼と共助を確固たるものにしながら推進されなければならないと思います。

例えば6カ国協議においても、韓、米、日の共助が必要です。北朝鮮に対して、核を必ず放棄しなければならないということ、つまり放棄すればプラス点があって、放棄しないならば未来のない、希望のない状態になると

いった、確固たるメッセージを出せるようにすべきです。韓、米、日だけでなく、中国とロシアの積極的な協力も導き出すことによって、共助と協力の方向へ向かわないといけないと思います。このようになったときに初めて、私たちは平和定着と共同发展を成し遂げられることができます。

そうすることによって南北の国民が自由にお互いを往来でき、また軍事的な脅威が消滅することになれば、あえて領土的な、あるいは政治的な統一でないとしても、それ自体が小さな統一とみられると思います。そうなるならば、それが、小さな共同体になると思います。これは十分成し遂げられると思います。

植村隆（朝日新聞） 02年5月に北朝鮮を訪問されて金総書記と会ったときに、金総書記が朴正熙大統領の経済政策を評価された、というふうにうかがいました。具体的にどのような話があったのか、そのエピソードを教えてくださいませんか。

朴 金正日委員長は、私の父について、いろいろと詳しく知っていると思いました。経済問題について、このように経済成長をなしたことに高く評価する、といったお話もありました。また、そうした経済成長、国を発展するために私の父がとった措置について、批判もあるけれども、それを理解し、支持するとの話もありました。

古川俊実（朝日新聞出身） 先ほど在日韓国人の地方参政権について触れられましたけれども、その問題について、首相や官房長官などとの話で要請したのかどうか。韓国ではすでに実施しているわけですが、その問題についておうかがいしたい。

朴 韓国では昨年、韓国にいる外国人に対して、地方選挙の参政権を付与する法案が通過いたしました。ことし5月31日の地方選挙において、日本人を含めた外国人が選挙権を行使できるようになります。

私は、こうしたお話も申しあげながら、在日韓国人に対する参政権の付与を検討してく

ださい、と申しあげました。これといった約束はありませんでしたが、積極的に前向きに検討されるといったお話はございました。

万代剛（山陰中央新報） 日韓関係が停滞しているひとつの要因に挙げられた竹島問題について、今後、話し合いで解決する余地があるのか、率直なお考えを聞かせてください。

朴 独島（竹島）の問題について申しあげますと、独島（竹島）は韓国の領土であります。ですから、解決策があるかどうかについては、韓国の領土だということを認めてくださるなら解決する、ということになりますね。

小菅幸一（朝日新聞） 4年前に金正日国防委員長と会談されて、南北間で信頼構築ができると確信されたというお話でした。金正日委員長という指導者に対して、個人的にどのような印象、評価をされたのかお聞きしたいのと、その後に新たな核問題が起こって、北朝鮮をめぐっては現在は膠着状態に陥っているわけです。そういう状況の変化の中で、金正日委員長あるいは北朝鮮に対する、朴代表の見方に何か変化があったのでしょうか。

合理的な選択を促すメッセージを

朴 一度会ってこうだとはいえないと思うんですけども、そのときの対話は、お互いに胸襟を開いて正直に話を交わしたと思います。

実は、私は4年前の北朝鮮訪問の2カ月ぐらい前に、ケンブリッジ大学からの招待でイギリスへ行きました。国際学術セミナーがあり、韓国の統一政策について、私が基調演説をいたしました。北朝鮮に行ったときにも、その基調講演のときの信念を同様に持っていました。ハンナラ党の代表になって対北朝鮮政策について話をするときも、そのときの基調をもって話をしています。この場で皆さんに話をしているいまもなお、それをベースにお話ししています。

北朝鮮について申しあげますと、私は、北朝鮮は2つのうちの1つを選択せざるを得ないと思います。つまり、いまのように核問題

を解決せずに引き続き孤立し閉鎖的に進むとするならば、結局、困難な経済問題を解決する方法もなく、何もできません。本当に暗い暗い洞穴の中に入るような、そんな絶望的な状態になると思います。何の希望もないわけです。それと違ったもうひとつの選択は、核を放棄し、国際社会の一員になり、韓国を含めた国際社会も、北朝鮮を積極的に支援し、投資もし、日本とアメリカともそれぞれ修好することによって経済難も解決し、次第に発展していく。この2つのうちの1つを必ず選択しなければならないわけです。

ですから、北朝鮮を真の意味で手助けするというのは、結局は、合理的な選択をするようにすることだと思います。この戦略的な選択をできずにさせているひとつの要因は、ある意味では逆説的なんですけれども、希望がないにもかかわらず北朝鮮が核を持つことで、今後何かできるかもしれないといった考えを持つような、混沌としたメッセージを与えるとか——。あるいはサポートしているように彼らに錯覚させるとか——。6カ国協議においても、ひとつのメッセージを出すのではなく、お互いに統一してないメッセージを出すとするならば、北朝鮮の核問題は膠着状態になると思います。そうすることによって北朝鮮を、またより厳しい状態に陥れることになるかもしれません。

キム・ミドク さっき歴史の対話ということに触れましたが、最も重要なのは、朴槿恵さんと金正日さんと安倍晋三さん、この三方の対話が非常に重要ではないかと思います。この三方の対話によって日本と朝鮮半島、北東アジアの歴史問題が解決されと考えますが、どのようにお考えでしょうか。

朴 歴史において、加害者と被害者があるからこそ、葛藤があると思います。また、いくらそれを変えとしても、これが100年たつとして、それが変わったり、なくなるかという、そうではない。変化することができない事実として、私たちの前にあるわけです。

こうした問題を解決するためには、これに対して、周辺国家の国民の情緒を配慮し、思

いやること。また、それに伴う行動が実践されることが肝心だと思います。

また、対話とは、問題を解決するために対話するわけですが、いま述べたようなことではないなら、対話だけして並行線をたどるといったことになるかもしれないと思います。

田村玲子（産経出身） 盧武鉉政権は米軍を悪者にして追い出そうとしています。日、米、韓の連携とか、世界の平和のためにもあまりいいことではないと思うんです。あなたが大統領になったら、在韓米軍に対して、どんなふうになさいますか。

朴 在韓米軍は、韓半島だけでなく、北東アジアの平和と安定のために大きな役割を果たしてきておりますし、いまもお必要だと思っています。在韓米軍問題で一番重要なのは、アメリカと韓国が同盟国としてお互いに安保問題について共助を確固たるものにし、信頼をもとに進めていくことです。戦略的な柔軟性などの話が出ていますが、実際に世界が変わってきていますから、それに伴い柔軟に対処できるいろいろな方法もあると思います。重要なのは、アメリカと韓国政府の間での信頼関係だと思います。変化があったときに、それについて深く議論し、互いに信頼の中で決定をし、また行動に移していくとすることです。

何の問題もないのに、互いに対話もせずに、こちら側で反対のことを話し、また反対側ではそれと違う話をするといった食い違った状態になるとするならば、安保においても大変不安な状態に陥ると思います。国民にとっても不安な状態になると思います。

ですから、私が国政運営の責任者になるとするならば、こうした問題は信頼が最も重要なので、アメリカとの信頼関係の中ですべての問題の解決策を講じていこうと思います。

若宮 最後に私に質問させていただきたいんですが、朴槿恵さんは、ごらんのとおりの大変エレガントな女性ですが、韓国のような儒教の影響のある国家で、果たして女性が本当に大統領になれるのかという疑問が隣の

国にもあるわけです。その点について、ハンナラ党首になられて2年の実感はいかがでしょうか。

もはや性別で選択する国民ではない

朴 韓国政治は、どうしてもまだ男性中心적입니다。ですが、私が政治の世界に入り、初めは、もちろん女性政治家に対するいろいろな偏見もありました。しかし、世界的な傾向もそうですし、韓国も非常に変化が多く、ダイナミックな社会でもあります。ですから、私が当初、政治に入門したときと比べますと、国民の考え方が大きく変化しています。しかし、私が政治の世界に入って最も難しかった点は、私が女性であり、大部分の政治家が男性であるといった点よりも、政治文化、改革されていない政治のほうが難しい問題でありました。

私たちが行くべき道は遠いと思うのですが、ハンナラ党は、政治が改革されなければならないといった国民の声、また政界の声を実行してまいりました。ハンナラ党ほど改革され、民主化された政党はないと思います。今後もより多くの努力を傾け、進めていかなければならないと思いますけれども、私が政界に入ってから、政治に対して「こうし

た文化ではだめだ」という思いがあったため、より一層改革の先頭に立って推進してきたといえるかもしれません。

また国民も、男性か女性かでリーダーを選択する国民ではないと思います。もちろん、中には女性はだめだと思う方もいらっしゃるかもしれないけれども、そうした方がいるとするならば、時代遅れだといえると思います。しかしながら、多くの方々は性別の問題ではなく、どれだけ国をうまく運営していくか、多くの問題をどれほどの能力を持って解決していくかといった、そうした基準をもって選択をするであろうと、私は思っています。

若宮 当クラブではこれまで、韓国から多くのゲストを迎えています。中でも盧泰愚さん、金泳三さん、金大中さんは、大統領になる前にここにいらしてスピーチをされました。そしてその後、お三方とも見事に大統領になられた。そういう意味でもここは大変縁起のいいところです。次は大統領として来られるとすれば、我々はまた大歓迎したいと思います。きょうはどうもありがとうございました。

通訳 = 李ヘリ

文責・編集部